コーチを解剖する

バスケットボールのコーチ哲学の論義については、しばしば大げさであったり、また甚だ観念論的であったりする。おそらく[redacted]私もうっかりしていると、そんな話をしてしまいそうだ。

コーチというものは、まず自分が教師であることを絶対に忘れてはいけない。何年か前に、ある教授が自分の教育哲学を、次のような3つの義務に要約した。つまり教師は“来て、見て、克服しなければならない”と。私はいつも彼のモットーをコーチ技術に適用しようとしている。なぜなら、コーチは練習に出て、選手の様子などを診断して、それを正さなければならないからである。コーチは、選手がゲームの基本的なことを実行するように、適切にかつ効果的に教えなくてはならない。

ひとたび、自分の哲学的基礎が固まってしまえば、あとはコーチは目標に向かって全力を注がなければならない。それを完成させることに全力を尽さないコーチがいたら、それは犬にもおとるというものだ。しかしながら、コーチングやプレーにおける成功は、ゲームの勝ち敗けの数できまるものではなく、むしろ、彼の能力や手腕、相手の能力、試合の場所を考慮にいれた時、他人と比較して、各々個人がどのような事をしたかということによるべきである。

成功は、各人が自分は最善をつくしたということを知り満足することからくる。

ジョージ・モリアリティが、かつて言ったのだが「私には、全力を注ぐことが勝利からそれほど遠いとは思われない」従って最終的な分析においては、自分の成功を決定するのは自分自身だということになる。他人は欺けても、自分自身は欺けないからである。

完璧への到達は不可能だが、しかしそれを目標としなければならない。ゲームの勝ち敗けの数には関係なしに、目的を達成するための100％の努力をしなければ、とうてい成功は得られない。

コーチは各選手に、相手は背も高く、足も速く、ジャンプも高いが、チーム精神や忠実さ、熱意、協力、決断力、真面目さ、闘争心、性格においては、君たちほど秀れてはいないということを伝えなければならない。チームがこれらの特色を持ちつづけるのを助けるコーチなら成功である。

この章においては、ビルと私は選手の学生生活とか社会的環境あるいは家族と接触する場合のコーチの役割について論ずるつもりだ。それからまたコーチとして持たなければならない、あるいは持つように努力すべき特質についても強調したい。我々は多くの絶対的な原則をあげるだろうが、その時は私たちもまた、人間であるということを思い出してほしい。我々は自分たちの成功を願っているし、また失敗を悲しみもする。そこで何年か前に起こったある出来事を考えてみてほしい。

高校のコーチを始めたばかりの頃、私は今でも恥ずかしく残念に思うことをしてしまった。私たちのチームに大変まじめな少年がい

た。彼は推薦状を書くほど活躍していたわけではなかったが、コーチの推薦する者を表彰する判定委員会があって、そこでは私の推薦した者を認めるにちがいなかった。私は彼は不適当ではないかという反対を押しきって、彼を推薦しようとすでに決めていた。

ところがある日、彼の父親が私の事務所にやってきて、挨拶もろくにしないで「ジョーは推薦状をもらえるのかね」と言った。私は「ええ、私はそう思っているのですが、ただ試合経験があまりないのでどうかわかりません」と言った。すると彼は指をつき出して、「それなら推薦状を書いた方が身のためだ。さもないと君は職を失うぞ」と言った。

私は彼に出て行けとどなった。当時は私も若くて血の気も多かったので、彼の言葉にカッとして、絶対彼を推薦するものかと決めてしまい、事実彼を推薦しなかった。

私は、その子に賞をやろうと決心していたのに、彼の父親に強い態度に出られて感情的になってしまったのだ。あとになって、私は賞のリストを変えようとしたけれどももう遅すぎて、結局彼は賞をもらえなかった。私はその時のことを思うと、悔やまれると同時に恥ずかしくてならない。そしてこのことは、コーチとしての私に今日まで、ずっと教訓となっている。

今日では、周囲の者全部との関係を円滑にするために、仲間とのコミュニケーションの必要性ということが多く言われている。子供たちがよくきく音楽の多くは、コミュニケーションの方法を強めるためのものであり、この方法が私のコーチ哲学の礎石となっている。

コーチならば、ルールに精通し、基礎をマスターし、ゲームの作戦に長じているかもしれない。しかしもし彼が、誇りとか、尊敬とか、信頼とかを彼のプレーヤーたちに、徐々に浸透させることができなかったり、また彼の同僚たちと話し合わなかったり、生徒の両親や報道関係者や先輩、それに関心を持っている一般の人々を避けたりするならば、彼のコーチとしての生命はそんなに長くはないだろう。指導者というのは、自分の感情を殺さなければならないものである。コーチングの技術は、習得できるものであるが、効果的なコミュニケーションは本質的なものである。ここにコミュニケーターとしてのコーチの一例をあげよう。

特に少年たち相手のコーチは、恐ろしいものだが経験することは大きな価値をもっている。コーチはしばしば少年たちにとっては、家の外での最初の崇拝の的になるものだ。ビル・スローンは、私の最初のバスケットコーチであるが、彼の教えてくれたことは一生忘れることができない。私は13歳で、130ポンドのやせっぽちだった。スローンコーチは、ＵＳＣでフットボールの技術にすぐれていた、私たちの学校のよいフットボールのコーチだった。しかし、バスケットボールのシーズンになると、ＣとＤチームのバスケットのコーチも兼ねていた。私はＤチームだったが、彼は本当に立派なコーチで、経験の浅いチームも彼の指導によく応えた。彼はよき指導者たり得る２つのものを持っていた。それは、きびしさと熱意だった。我々はそのシーズン中一度も負けることがなかった。

バスケットボールは、ビルの専門のスポーツではなかったが、技術的な面以外のところで、それを補っていた。彼が教えてくれた事は今でも頭にこびりついている。それはバスケットボールはチームプレーであり、個人的なスター・プレーヤーのものではないという

ことだ。彼は若くて熱心な者たちのグループをとりあげ、我々を強い結びつきを持った単位とした。彼は我々が自らを信じるようにしむけ、まとまったチームにした。お互いの能力を磨きながら、我々はよい成果をあげた。なぜなら、我々は共にプレーできるようになったからである。

我々もそうだったが、若者たちは、いつもよく言うことをきくわけではない。現代のコーチへのアドバイスとして次のような事をいっておこう。つまり、プレーヤーと開放的に話し合いをするように努力し、柔軟性を持てということである。

独裁的なコーチは、応々にして無力であり、プレーヤーとの本当の接触をしそこなう。そして、プレーヤーと同じラインに立って行動すること。それによってプレーヤーが何か問題をかかえている時に、それをコーチに提案し易くなる。言ってきかせるよりもたずねること。プレーヤーは、しばしばコーチが思っていること、そのものずばりを提案するだろう。コーチすることは、結局人間の心理学の一形態なのだ。コーチはチームのリーダーではないということはほのめかすべきではない。これが私の指導のほんの一例である。

コーチ哲学の展開

コーチのための10大原則

辞書によれば、コーチとは〝競技会のために、運動選手を教え、訓練し、そしてコンディション調整を行なう人〟と定義している。続く2つの章で、我々はコーチを訓練し、また、コンディションを調整する人として焦点をあててみよう。しかしこの章では教育者として扱うことにする。ゲームの実際のプレーに関しての最も重大な責務は、プレーヤーがゲームに必要な様々な基礎を実行できるように、適切にかつ効果的に教えることにあるのだから、まず第1に、コーチは教師であるということである。ここにコーチであり、教師であるための絶対に必要な、そして重要な10ヵ条の事柄をあげる。

1．コーチはバスケットボールのゲームに関する徹底した知識を持たなければならない。バスケットボールの起源から、どのように発展し現在の洗練されたレベルに達したか、そのAからZまでをすべて知らなければならない。
2．コーチは人間の心理状態、個人差、人間関係、社会問題、健康教育などの分野を含む幅広い一般的な知識を持たなければならない。
3．コーチは教師としての技術を持ち、映画やテレビのテープ、その他〝THE KIT〟に含まれるような役に立つ多くのものを利用しなければならない。
4．コーチは、チーム、学校、社会に対して、プロとして、態度を明確に持たなければならない。なぜなら、コーチは、総合的な献身を要求される職業だからである。
5．コーチは、多くのコーチング上の役割に関して訓練を積んでいなければならないし、また、コートの内外を問わずプレーヤーたちに訓練を求めることができなければならない。リーダーシップと合理的な訓練を必要とすることとは同じことである。
6．コーチは、この手引きの全頁を通じて強調しているように、しっかりと系統立った考え方をもっていなければならない。それが十分にできないコーチで

ある場合、その第1の大きな損害というのはチーム全体のゲームや練習に対する興味の減退であるということを忘れてはならない。そうした失敗をすることは、試合に負ける準備をしているようなものである。

7．コーチは、学校においても更に大きな共同体の中でも、健康的で活動的なコミュニケーションを持つように、熱心に努めなければならない。成功するコーチは、他人の援助を受けようとすると同時に、できるだけ他人に力を貸したりするものである。

8．コーチは、プレーヤーたちを夫々一個人として扱い、えこひいきをしないで、プレーヤーとの間によい関係をつくり出し、その関係を持続させるようにしなければならない。彼らにはチームの1構成員であるという自覚をもたせ、正選手や補欠という区別した考え方をしない。

9．コーチは、温かい人間性、快くコミュニケートする気持、心から他人のことを考える気持を持たなければならない。

10．コーチは、向上しようという気持を常に持ちつづけていなければならない。

性格が適しているかどうか

性格の特色は、常にその人の選んだ分野が、銀行家であっても、事業家であっても、バスケットボール・コーチであっても、成功するかどうかという個々の見込みを決定する重大な要素になる。何故ならば、正規のシーズン中に、コーチは少なくとも15種類の違った個性を扱うので、心理学の熱心な学究者になる必要がある。コーチは様々な状態の人間の感情を扱うことができなければならない。しかしまず第1に自分自身を知ることである。

成功するコーチは、次のようなシェークスピアの〝自己を知ることこそ、真実である〟という言葉に従うに違いない。そこで、コーチが成功するために持たなければならない、いくつかの基本的な性格の特質を挙げてみよう。

勤勉さ

努力にとってかわるものはない。綿密な計画と熱心な働きはそのシーズンを価値のあるものにする。例えそれが不可能に思われても、完全なものにするために努力すべきであり、追求していかなければならない。近道や安易な方法では、ゴールに到達することはできないということを覚えておく。

熱　意

このコーチの手引きの著者たちはこの点を十分に強調することはできない。たぶん〝自分の好きなことをせよ。そうすれば、することが好きになるだろう〟という言葉が、適切なモットーになるだろう。熱意は、他人に伝わりやすく、それに触れた人々に影響を与えるということを覚えておくとよい。だから自分の仕事に心を注げ。熱心なコーチは、若者たちを1つの精神に、また結合力のある共同体にすばやく団結させていくことができるのである。

同　情

コーチは、少年たちに対して真の愛情を持っていなければならない。彼らの個人差とか要求とか、感情などを考慮してやらなければならない。練習が終った後の数分間を個人的な問題について話し合いたいと思っているプレーヤーのために役立てることをすすめたい。

個人的な話題はプレーヤーを打ち解けさせ、彼を悩ませている問題への洞察を与えることができるものである。

判断力

これはしばしば経験を通して身につく特質である。しかし常識の中で処理するということが非常に大切である。コーチはそのメンバー、ゲーム、技術、トレーニングに関して、自分なりの価値観を発展させなければならない。

セルフ・コントロール

コーチは自分の感情をコントロールできなくてはならない、というのは彼はチームのリーダーであり、どんな時でも冷静な判断を下さなければならないからである。彼は規律をおしすすめなくてはならないが、同時に、公平でなければならない。コーチは悪意を抱いたりしてはならない。もしもチームの誰かがチームをとび出したら、コーチは彼を意地でも連れ戻してやるものかというような尊大さを持ってはいけない。人生におけるすべての決定は、それが実りあるものになると思われる時にのみ、ちゃんとした理由をもってなされるべきである。

誠実さ

コーチは真面目で誠実でなければならない。さもないとプレーヤーたちは彼を尊敬しなくなるだろう。見せかけやごまかしをやめ、自分自身のありのままの姿を見せることだ。今日の若者たちは、非常にすばやく不真面目な人や、不誠実な人を見抜くことができる。

忍　耐

かけだしのコーチに一番欠けているものの1つが忍耐である。そういう人には、そんなに多くを期待することができない。新しい習慣を形成しながら、古くて効果のない習慣を捨てていくことは、段階を追って学んでいかなくてはならないことなのである。

細かいことへの配慮

バスケットボールは、習慣のゲームであり、習慣とは細かいことを注意深く応用した結果得られるものである。図表や記録を保管しておく。チャンピオンとチャンピオンに近いチームとの僅かの差は、大切な細かいことをより完全に実行しているか否かである。準備を怠るということは、失敗への準備をしているのと同じだ。今は小さなことでも、後になって大きな意味を持つようになるのである。

公平さ

チームのメンバーからはずすことが必要になった時には、その若者が公正な機会を与えられてきたという認識を確かに持てるように試みてみることが必要である。

高潔さ

コーチは、コートの中でも外でも、常に若者のリーダーである。不健全で不正直なコーチは、コーチとしては不用である。

意味深いコーチ法の原理

コーチ法の基礎となるべき原理が2つある。次の2つの章でもっとそれらを強調するつもりであるが、この章でも、その重要性だけは書いておこう。

その1つは、コンディション作りである――知的にも精神的にも身体的にもよいコンディションを作りあげることである。もしコンディション作りに注意しないと、そのシーズンは悲惨な結果になりかねないので、これは彼

の身体的な準備を決定するものでもある。

2つめは基礎作りである。合理的なフロアープレーのための基本となるものは、基礎的な原理をすばやく実行することである。プレーヤーたちがたちどころに反応するように教えなければならない。事実、基本を忠実に実行すれば、プレーを活気あるものにする。

しかし、活気のあるプレーだけが基本に忠実だということにはならない。

次に習慣的なものになってほしいと思ういくつかの原理を挙げておく。

1．コーチはよい習慣をつけたり、悪い習慣を打ち破るために時間をとり、そのための忍耐力を持たなければならない。基本が自分のものになるまで、絶えず基本を繰り返すことが第1に大切なことである。これらの技術を教えることは、一朝一夕にできるものではなく、あまりに急ぎ過ぎたり、あまりに多くの量を期待してはいけない。

2．コーチとプレーヤーは、決して満足してしまってはいけない。いつも改良すべき点は残っているのだし、お互いにそれらの点を認識するよう努力しなければならない。そしてそれは価値のある探求である。

3．コーチは教えすぎるよりはむしろ教えることを選択して教えるべきである。少ないことを十分に実行できるように教えた方がよいのである。

4．コーチは彼の頭が堅いためにプレーヤーの自発的で創造的な発達を破壊するようなことがあってはならない。プレーヤーの独創力は、相手側のミスをさそいだす。そして、それはゲームを勝利に導くのだ。

5．コーチは多くの試合を通じて、各々のポジションに同等の得点チャンスが与えられるようなバランスのとれた攻撃法を工夫しなければならない。

6．コーチはゲームを作りあげているごく細かい目だたない点にも、気づくべきである。そこから並のチームと偉大なチームとの差が生まれるのである。

7．コーチは常に、自分自身やプレーヤーについて分析し、その結果行動するべきである。

8．コーチは積極的に活動し、ゲームの全般にわたり、チームのプライドを高めるべきである。相手に対してはあくまで待ちかまえるのであって、恐れるものではない。相手を悩ませてやろう。

9．コーチは同じくらいのチームと当たった時には、コンディショニングが勝敗の決定的な要素となることをプレーヤーに自覚させるようにせよ。もし、優勢だとわかったら、ゲームの早い時期にプレッシャーをかけなければならない。そうすれば相手は、自分たちが疲れないうちに、先に疲れてしまうだろう。

10．コーチは、レギュラーの選手を作るというのではなしに、一つのチームを作りあげなくてはならない。

コーチとプレーヤーの関係を確立する

コート上の提案

バスケットボールのシーズンは長いし、大変なものである。特に負け越しそうな時はなおさらである。その中でコーチが直面する最

もデリケートな問題の１つは、チームのメンバーとの関係である。メンバーがまとまってくればくる程、コーチは彼らの問題即ち身体的、精神的コンディションとか、判断できない好調さとか低迷さとかの問題に気がつくようになる。もしも彼がチームとのよい関係を固めたいと本気で努力するならば、次の諺が役に立つだろう。〝親しみあうことにより、相互の尊敬は育つ〟

ここに役に立つと思われるいくつかの項目をあげてみよう。

1．個々のプレーヤーとの関係を親密にせよ。しかし彼らの尊敬は失わないように。彼らの個人的な問題に関心を持ち、気軽に近づいていこう。そして自分がそれを心配しているということを知らせよ。
2．横柄な態度にならないように訓練をつづける。公明正大で無理じいすることなく指導する。
3．各プレーヤーの個性を理解し、尊重し、それにしたがって訓練する。つまり、個人に応じた扱い方をするということである。
4．皆が、同等に責任を分ちあうようにする。
5．プレーヤーたちだけでなく、自分自身をも同じように分析し、その結果にしたがって自己管理をする。
6．〝認めてやる〟ことは、大きな刺激となる。特にきびしい批評をしたあとでは、背中をポンとたたいてやることだ。
7．もしも、忠実さとか親切さとか他人の権利を尊重することなどを教えようとするならば、適切なチーム精神を持つ協力的なチームに一歩前進することだろう。嫉妬、利己主義、ねたみ、あらさがしなどは前進を阻んでしまう。
8．チームを第１に考える。しかしそのために１人１人を犠牲にしてはならない。
9．感情的になったり、尊大になったりしてはいけない。スケールを大きくし、いつでも変化できるようにする。進歩というものは、変化することから始まる。

コート外の援助者

シーズン中は、しばしばコーチにとってはプレーヤーとのコミュニケーションを深めるために力になってくれる他の人が必要となる。ふだんから陽気な若者が、チームメートと仲が悪くなり、コーチに反抗的になった時こそ、コーチは彼と話し合わなくてはならない。それでも問題が解決しない時には、コーチは進んで他のメンバーと話し合ったりして、その原因をつきとめることだ。ふだん彼らはそのカギを示してくれるだろう。それでもだめだった場合、バスケットボールとは別のところでその原因を探さなくてはならない。

コーチが接触しなくてはならない人たちをあげてみよう。

1．コーチはプレーヤーの家族と何気ないよい関係を持っているべきだ。そうすれば心配ごとが起こった時には、彼らがその一番のよりどころとなるのだから。家族の者は、その子が悪い仲間と遊んではいないかとか、健康がすぐれないとか、ゲームに出られないのではないかとかをコーチに話してくれるだろう。もしかしたらガールフレンドの問題で悩んでいるかも知れない。
時々コーチは家庭の中の問題を学ぶことがある。それは経済上の問題だった

り、家族の分裂だったり、両親の離婚だったりする。また、若者というのは心配ごとや欲求不満があると、それをおもてに出すものだ。

2．もう1つのよりどころは、彼の先生である。先生たちの目にも、彼は変わったように見えるかどうか。宿題をしなかったり、試験で悪い点をとったりしていないだろうか。バスケットのフロアーと同じように、教室で話しをするのを避けたり、近づきにくかったりということはないだろうか。

3．他のコーチが関係する可能性もある。今の彼の行動パターンが前にもあったことかどうかを彼が以前についていたコーチに聞いてみるのである。過去に彼はそういう問題から抜け出ることが出来たかどうか。それともチーム精神に反する者として、みんなからやめさせられたのだろうか。

4．トレーナーをつける余裕があるほど幸運なチームだったら、コーチはトレーナーに相談するべきだ。しばしばプレーヤーがトレーナーと親しくつき合うというのは、コーチほどきびしく訓練を命令しないからということが考えられる。したがってプレーヤーは、しばしば彼に対しては卒直でくったくがない。特に彼らが負傷をコーチからかくそうとする時など。

コーチと社会との関係をつくりだす

学部と大学管理者

学校の管理者たちとよい関係にあることが望ましい。コーチの成功は、彼らにとっても成功なのである。彼らはいろいろな点で役に立ってくれる。ホームゲームでも遠征ゲームでも出かけてきて観戦者になり、新しい設備を注文してくれたり、交通の手配をしてくれたり、その他数えきれない程の事をしてくれる。バスケットボールの予定が多くなると、彼らの援助は欠くことができないものとなる。私たちはあまりにたくさんのコーチが、学校管理者たちと疎遠だったのを知っている。彼らに信頼されるようになれば、そのお返しとして、協力が得られる。コーチは教職員として認められるべきで同じ恩恵もこうむるべきだ。コーチは教職員とちがった規則のもとで何か頼んだ仕事をしたりすべきではない。

コーチは同僚に自分の教育哲学を知らせるべきだ。それによりバスケットボールが、学究的であることを強調し、正課ではないが大切な課外活動であるという事実を受け入れさせることになる。プレーヤーに、クラス内で何か問題があった場合、同僚である担任教師に近づきアドバイスを受けておくべきである。頼みごとをしてはいけない——必要な時にだけ臨時に頼むのがよい。

〔注〕アメリカの大学の運動部

アメリカの大学における大学と運動部との関係は、日本の大学と異なる点がある。バスケットボールをはじめとして、フットボール、ベースボールなど、ほとんどの種目は、Athletic Department（体育局）に属しており、大学執行部の直接の管理下にあるわけではない。Athletic Department はそれ自体1つの独立体としての機構を持ち、大学からの経済的な援助は多少あるけれども、競技会を主催し、それからの

収入が財源の大部分になっている。各種目のヘッドコーチをはじめとして、アシスタントコーチ、トレーナーにいたるまで、体育局で給料を支払っている。それ故、コーチ陣はプロフェッショナルであって、大学の一般的な講義、実技を担当する教官ではなくて、その運動部の指導に専心あたることになっている。成績如何によっては、更迭もあり得るわけである。

学生たち

学校全体の代表として、チームは忠実なファンの活気にみちた声援を持っている。コーチはその伝統を引き継ぐべきだ。チーム精神は、プレーヤーにとって欠くことのできないものだが、学校精神もまた学生にとっては、欠くことのできないものだ。コーチは学校の集会で役に立ったり、ゲームの指導中は紳士であり、キャンパスでは学生に対して、親しみやすい人であったりすることにより、ファンの支持を高めることができるのである。

プレーヤーの両親たち

プレーヤーの両親を知れば知るほど、プレーヤーを知り援助してやることが容易になる。

結局コーチも両親もプレーヤーのやっていることに本当に関心を持っているのである。プレーヤーたちをより好みしないのと同じように、彼らの両親もより好みしてはいけない。

仲間のコーチたち

成功するコーチとは、必ずしも勝ち運のついている人というのではなく、仲間のコーチを大いに尊重する人のことである。彼らは、コーチをプレーヤーと共に、その時の状況において、できる限りの力を出せる人として認める。コーチ・クリニックに出席したり、ルール改正やルールの解釈に関する委員会や、協議会などに出席することによって、他のコーチたちと個人的に会うこともできるし、ゲームについても共に考えたり意見を交換したりできる。コーチというのは、崇高な職業なのであり、仲間への尊敬は、どれだけ自分が〝コーチ〟の名に値するかということの反映なのである。

社会と報道関係

コーチは、社会のメンバーと広く協力しあうために努力すべきである。会合や昼食の時に話をすることによって、自分の計画に対する理解と支持を集めることができるし、このようにして、よい関係を固めることができる。コーチは又、新聞関係者例えば大都市の日刊紙、郊外の週刊紙、それに学校新聞の記者たちと近づくべきだ。彼らは皆彼がよい仕事をするのを手助けすることができる。学校新聞は、プレーヤーに影響を与えるのと同様、学生たちや教職員の注目を集めることができる。地方の新聞や都市の新聞、雑誌も地元の支持やより広い範囲の支持を集めることができる。コーチが、マスメディアのすべての部門とよい関係を確立するためには、彼の率いるチームによることが多いのである。

特別な問題の取扱い

風　紀

チーム精神を発展させ、支えていくのは、コーチの第１の仕事だ。チームは１つだという意識なしにスポーツをする時、チーム全体の関係はよいとはいえないし、疑問だ。コーチはチームワークと無私の精神を持ちつづけるために、さまざまな心理学的テクニックを

使えるようにしておかなくてはならない。確かにシーズン中には、沈滞した時もあるはずだ。しかし勢いをすばやくとり戻すために努力せよ。利己主義、嫉妬、批判的態度に関する問題には、いつも用心しなければならない。もしもそれらがおもてにでてしまうと、チームを破壊することになりかねない。

どんなチームでも、得点力のあるスターが１人や２人はいるものだ。彼らはゲームを支配し、新聞の見出しにも載る。その場合、他のメンバーとの調和を考え彼１人だけを浮き上がらせてはいけない。得点力のある者は、個人的な祝福を受けるべきで、公には試合を盛りたてる力のある者が祝福されるべきである。プレーヤーは、チーム精神と誇りのためには、個人的な栄誉を受けるのはやめるべきだ。

プレーヤーの健康

「コーチ、大丈夫です。アスピリンを４個飲んだし、熱も38度に下りました。試合に出させて下さい」というような言葉をこれまで何度聞いたことか。

コーチは適切な見通しのもとに、ゲームを進めていくことを学ばなければならない。シーズン中、メンバーの身体的精神的な安全に気を配ることは、コーチの務めである。病気の若者をプレーさせることは絶対にいけない。負傷したプレーヤーの熱心な嘆願に負けて、その負傷が治らなくなる危険を犯しながら、プレーさせるようなことは絶対にいけない。

負傷したプレーヤーで冒険をしたコーチは、コート内で疾患者をつくる原因となり、メンバーからは非難され、最悪の場合には、プレーヤーの負傷を治らなくした責任があるというらく印を押されてしまう。ゲームに勝つために、プレーヤーの健康に関して冒険を試みる必要はない。覚えておいてよいことをいくつかあげよう。

1．プレーヤーの安全については、慎重に判断して心配な時には医者に相談する。
2．チームのメンバーは、１人１人が何らかの保険によって保護されるようにしておく。そういう計画がない場合は、そのような保護を制度化するように主張すべきだ。プレーヤーは数ドル払うだけでシーズン全体を通じて保護されるのである。
冒険だけはするな！
3．プレーをしたいために、健康でないことがわかっているのに健康だと主張するプレーヤーがいる。そのような時でも、コーチは決心を翻してはならない。

服装と髪型

このような自由の社会であっても、コーチは標準的な服装を決めるべきだ。特に遠征に行く場合など。プレーヤーたちは、目的地が学校だろうと、教会だろうと、クラブだろうと、公の代表として訪れるのだということを忘れてはならない。このように自覚することによって、支持者の信頼に応えるべきなのである。きちんとしていることが一番だ。

チームのメンバーがネクタイをすべきかどうかはコーチの判断によろう。きちんとすることは何も正式な服装をしなくてもできるのだから。中にはおそろいのジャケットやブレザーを着て遠征に行くチームもある。もし予算が許すなら、ぜひそういう服をそろえてみることをすすめる。店ではきっとジャケットをそろえることを勧め、後援者に原価で売ってくれるだろう。このようにしてプレーヤーは、シーズンを通じてどんな服装が適当かを知る。

しかし、髪の長さについては、微妙な問題がある。それでも次にあげる4つの理由により、髪は適当な短さにしておくべきだと主張したい。1つは、乾かすのが簡単だということ。プレーヤーは練習後のシャワーで、たぶん自分の髪を濡らしているが、短ければ、夜の空気にあたっても風邪をひく機会は少ない。長い髪はプレーヤーの顔にかかりがちで、シュートをする時、目の邪魔になる可能性もあること。又汗も多くかき、汗が目に入ったりすると視界がそこなわれ、手でぬぐったりするとボールが扱いづらくなること。最後に長い髪はきちんとしておくのが難しい。

6番目のプレーヤー

補欠については、後の章で述べるつもりだが、補欠の役割については、ここで特別なコーチ法の問題として論ずるべきだと思う。もしも6人目が実力に恵まれていて、なおかつ自分の役割にやりがいを感じているのだったら、コーチは幸運だ。というのは、ほとんどのプレーヤーはコートに出たがるからだ。しかし補欠とはチームの中でも最も重要な役割の1つなのだという考えを受け入れるよう教えなくてはならない。試合に出るとなったら何らかの働きをして試合を盛りあげなければならない。そして、てきぱきしたパスと正確なシュートで、ゲームのテンポをつかむ能力のある補欠を深すのは、スターティング・メンバーを見つけるよりも難しい。従って補欠選手は、チームの努力に対する彼の貢献度がいつも問題にされなくてはならない。彼の働きがどのように評価できるかを教えてやり、新聞記者との話し合いを通して、彼に伝えてやるようにする。

敗　戦

我々はだれでも勝ちたいと思う。チャールズ・シュルツの漫画の主人公チャーリー・ブラウンは、それをうまい言葉で言いあてている。〝勝利がすべてではないが、敗北は何もない〟しかしこの手引きで何度もくり返してきたように、コーチングの成功とは、プレーヤーに100％のものを与え、同じ方法でそれに応じさせることである。私たち2人は、両方とも、コーチとして勝利を収めようとしていた時があった。しかしそんなことは春の天気と同じくらい変わりやすいことだ。太陽がどんなに照っていて暖かくても、レインコートだけは忘れないように。夕立はついそこまできているのだから。その時にはコーチとして失望することを覚悟しておかなくてはならない。コーチが成功するのは何も勝ったシーズンだけではないのだ。不運をのり越えて強くなっていくのである。負けた後でプレーのせいにし、個人的に批難したりしてはいけない。むしろ何が悪くてこうなったかを強調せよ。負けた試合は、次の試合へのよい教訓となるのだから、その教訓を学ばなくてはならないのだ。失敗は有効に生かさなくてはならない。

チームメンバーが共有する
コーチングの哲学

チーム精神

チームにはワンマンやスターはいらない。いるのは5人からなる1つのチームである。言いかえれば、各々のメンバーが得点能力を持ち、できれば相手よりも高くジャンプでき活発で、相手の得点を完全に防ぐというよう

な平均した能力をもつチームが必要なのである。１個の強い鎖よりは、弱い鎖の環の方が強い。正面観覧席（特別席）に向かって精をだすようなプレーヤーが１人いても、よく統率されたチームがだめになってしまう。

我々はゲーム中の１秒１秒に、自分のベストを尽せるメンバーを持ち〝みんなのための１人、１人のためのみんな〟でなければならない。チームが第１であり、個人的な名声は次である。我々のチームにわがままや利己主義やねたみがあってはならない。

我々の求めるのは恐れを知らず、自惚れることもなく、一生けんめい、公正にしかも勝利を目ざしてプレーするファイターたちの集まりである。そして、〝敗けたくないと思うチームは敗けない〟ということを忘れないこと。〝試合を捨てた者は決して勝てないし、勝利者には決して試合を捨てなかった者がなる〟ということを信じよう。

ゲームが始まる前に、絶対負けないぞということと、相手よりも活発にプレーするぞということを決心する。言いかえれば、勝てるという確信をもってプレーすれば、勝てるようになるということである。

他のチームは、我々よりも足が速く、体格もよく、能力もすぐれているかもしれない。しかし、どのチームもチーム精神、闘志、決断力、希望及び気骨の点で、我々のチームに劣るはずである。